

千葉県房総半島の南端に近い海岸にある清海という小さな漁村を田之浦信平が訪ねたのは今年の春のことだ。数えてみるとかれこれ五十年ぶりのことだった。太平洋の荒波が水しぶきを上げて碎ける磯と切り立った岩山とに挟まれたその小さな村は、信平の親友黒田徹の生まれ育った所で、学生時代休みのたびにおじゃまして泊めてもらい、家族同様の扱いをして貰った所である。夏休みには海水浴場にテント張りの海の家を建てて学費を稼がせて貰ったこともある。海釣りも徹に教えられて上達し、十五キロのハマチを仕留めたこともあった。小さな原動機付き漁船で銭州を経て大島まで航海したこともあった。盆踊りも楽しかった。土地の若者と撲り合いのけんかをしたこともあった。清海は、そんな青春時代の思い出がいっぱい詰まった所だった。

しかし、桜の花がようやく開き始めるのを待って故郷の姫路を出て千葉へ向った田之浦信平には、五十年前の思い出に浸るだけの心のゆとりはなかった。清海町の実家で死にかけている親友の黒田徹に会って、生涯の別れを告げるための旅だったからである。黒田徹は一昨年七十歳になったとたんに脳梗塞で倒れ、しばらくは新宿の病院を出たり入ったりして療養していたが、二年前ぐらいから意識も無くなり、医者に匙を投げられた形で退院させられ、いわゆる植物人間のようになって、奥さんがそれまで住んでいた杉並の家から生まれ故郷の清海へ連れ帰ったらしかった。ふるさとで最期を迎えさせてやりたいという気持ちだけでなく、奥さんは清海に九十八の父親と九十五の母親を持っていて、その世話のためにも帰郷する必要があったのだ。

その話を知って、田之浦信平はすぐにも清海へ駆けつけて徹を見舞い、奥さんの春菜さんを励ましてやりたかった。なにしろ徹とは大学一年のとき東京で出会ってから四年間生活も苦楽も共にし、大学卒業後南米へ共に移住しようと誓い合って、同じ海外移住研究会へ入り、「笠戸寮」という木造の合宿所に寝起きして一つ釜の飯を食べた仲だったし、徹の奥さんになった春菜さんもやはり大学の同じ研究会の後輩だった。三人とも家の都合で移住を断念させられて日本へ留まったが、それ以後も年に数回は会って旧交を温め合っていた仲だったから、何はともあれ、飛んででも行って二人を励ましてやらねばならない立場でもあったのだが、信平自身が大腸癌と心臓の手術を受けて、生死の間をさまざまに迷っていたのだ。九死に一生を得て退院してからも半分寝たきりで介護人付ききりの状態が半年も続いたので、見舞いに行くどころではなかった。そのうえ平成六年一月の阪神淡路大震災のときに神戸の家と妻とを同時に失って足腰立たない状態で姫路市の鉄鋼会社で働く長男の家へ引き取って貰った身だったので、ようやく自力で歩行できるようになってからも、なかなか旅行へ行きたいと

は言い出し難かった。月々の生活費は十分に払っていたから居候でも扶養家族でもなかったが、息子の嫁には様々な面倒を掛けただけに遠慮も弱味もあった。また三人の孫達にまで、一室を占領している申し訳無さを感じざるをえない状況だった。

千葉の黒田徹の家へ長距離電話を掛けるのも気が引けたので、信平はテレホンカードを買って、家から離れた公園にある公衆電話ボックスから掛けた。

「そんなわけで、やっと歩けるようになったから、もう少し暖かくなったら、徹の見舞いに行くつもりなんだ」

彼は徹の奥さんの春菜に言った。友達の家さんではあるが、元は後輩だから遠慮は要らない。春菜も逆に信平に対しては歯に衣を着せるようなことはない。

「まあ、先輩、リハビリの甲斐があつて、歩けるどころか旅行まで出来るようになって、ほんとうによかったですね？ ……でも、そのお気持も嬉しいし、先輩にも久しぶりにお会いしたいけど、お見舞いには来ないで……」

「え？ どうして……？ 迷惑掛けない……」

「いえ、そんな意味じゃなくて……。実は、これまで言いませんでしたけど、来て頂いても、徹は眼も見えないし、話もできないんですよ。多分先輩が来て頂いても、わからないかも……」

「なんだって！？ そんなにひどいのか！？ そんな……」

一瞬彼は呆然として言葉を失った。学生時代は人一倍元気で、柔道部から入部勧誘を受けるほど逞しい身体を持ち主だった徹が、寝たきりになったことは人づてに聞いていたが、まさか失明して、意識まで失っているとは信じられなかった。

気がつくと、彼は電話ボックスの中で切れた受話器を握りしめて立ったまま、泣いていて、近所の人達が心配そうにボックスの中を覗いていた。

ひたすら悲しかった。老いて病むことの残酷さがひしひしと身に沁みた。「人間は死んだらゴミだ」と団鬼六という作家は言ったが、自分と徹は死ぬ前からゴミ同然だと思った。生きていても何の役にも立たず、息子や嫁や孫に迷惑を掛けるだけで、一日も早くあの世へ行くことを期待されている。ゴミ以上に嫌われる有害産業廃棄物のような存在ではないか……。 (よし、行こう！ 死ぬ前に徹と会って、さよならを言おう！ 途中で倒れても、天運と思えばよい。どうせ遠からずお呼びが来る頃だし……)

と心に決めて、信平はその日から旅行のための体力作りのトレーニングを始めた。家の近くの親水緑道を少しずつ歩いた。最初は僅か百メートルほどの道を十分も掛かってカタツムリが這うように歩いた。それだけで膝がギシギシと鳴って痛み、胸が苦しくてへたり込むほどだったが、毎日少しずつ歩く距離と時間を伸ばして、三カ月ほどの間になんとか一キロほどの歩行ができるようになり、杖を使えば階段も昇り降りが可能になった。そして空が明るくなってきた。春が来たのだ。

そして桜前線が関西地方を通過した三月末の快晴の日の朝、信平は長年お世話になった長

男の家を出た。嫁には

「ちよつと友達のところへ行つてきます。今日は晩ごはんも要りません……」

と言っただけで、行き先は言わず、バス停の方へ歩いた。公園の桜の花はチラホラ開き始めていた。この花を再び見ることはないかもしれない、と彼は思った。自分の部屋の中はさりげなく片付けておいた。僅かな財産の相続に関する遺書もタンスの奥へ残しておいた。徹に会ったときの気分しただが、そのままどこか静かな場所へ行って、しこたま酒を食って、靴の中の睡眠薬を全部飲めば、酔払ったまま死んだ女房の待つ天国とやらへ行けるだろう……。

思えば流れる川の水のように自然でありふれた人生だった。昭和九年、太平洋戦争で後に戦死した父と平凡な市民だった母との間に四人兄弟妹の長男として神戸に生まれ、十歳のとき家を焼かれ、父を失い、食うや食わずで終戦を迎え、中学を出て夜間高校へ通いながら伯父さんの靴工場で働き、その伯父さんの援助を得て東京の大学へ進学し、ブラジルへの移住を計画したが、母親の急病のため移住を断念。神戸の総合商社へ就職。以後六十歳で地震に遭い退職するまで日本各地と東南アジア数カ国を転勤しつつ大過なく勤め、その間に一男一女を得て、育て上げた。震災で家と妻を失い、そのうえに外科的・内科的な疾患をいくつも抱え、以後十四年間闘病に明け暮れて生きている……と、簡単に言えばそれだけの人生だった。もつと言えば、震災で家が崩れたとき、もし前の晩接待酒で泥酔して玄関の応接間のソファで寝ていなかったら、寝室でいつものように妻と並んで寝ていたら、間違いなく上から落ちた屋根の重みで妻と同様ペシャンコになって終っていた人生だった。……いまさらそのポンコツのような生命を惜しむ気はさらさらなかった。役立たずの老いぼれが突然この世から消えても、誰も困る者はいないし嘆く人もいるはずがない。

JR 姫路駅から快速電車で新大阪へ出て、新幹線のぞみ号で東京へ走る。五十年前には夜行特急銀河号で一晩掛かった距離をたった三時間弱で走り抜ける。しかも東京駅へ着くと、その駅の地下ホームから外房線の特急が出るという便利の良さで、昔なら東京から蒸気機関車に引かれたガタゴト列車でたつぷり一日掛りで辿り着いた清海まで、姫路から結局六時間余りで到着したのだった。

駅へ着いてホームへ一足踏み出した瞬間、潮の匂いと海の霊気とオゾンをとつぷりと含んだ海風に顔を打たれ、眩しくて熱い陽光に眼を射られて、田之浦信平は思わずアツと叫んで立ちすくんでしまった。何十年もの時間が一瞬に逆戻りしたような不思議な感じだった。長い間忘れていた身体の中の躍動感が甦ったようだった。眩しくて一たん閉じた眼を開くと、なんとということだろう。五十年前に見たそのままの景色が広がっていた。

眼に沁みるようなネイビーブルーの海がキラキラと光り、空は抜けるように明るく、港の形も灯台も船も、海岸の通りも、昔のままだった。

駅を出てだらだらとした坂を下り、海岸通りを左へ曲り、網干し場を右に見て港を見下ろす小高い丘を上ると、見覚えのある松林が見えた。その松林を抜けると、石垣造りの塀と門

構え……そして古びた表札……黒田と辛うじて読める消えそうな筆跡を見ながら信平は門扉のない門を通って広い中庭に入った。

「こんにちは……」

何度も呼んだが返事はなくて、玄関はびったり閉まっている。仕方なく右手から家の横の台所と居間の方へ廻った。枯れた雑草が足に絡んだ。手入れもしていない荒れた庭だった。たしか昔そこには整然とした畑があって、キュウリやトマトやナスがいっぱいとれたはずだった……。信平は転ばぬように一歩一歩枯草を踏みしだくように歩いて母屋と昔呼んでいた木造の平屋の軒の下へ入った。

「こんにちは、こんにちは」

大声で呼んだが返事がない。午後の陽光が当って明るい縁側の下の敷石に乗って、廊下の奥のガラス戸の中の部屋を覗いた。そこは昔徹の家族と一緒に何度も食事した八畳の居間ははずだった。ひっそりと暗い部屋の中央あたりにぼんやりと白い大きな物が横たわっていた。眼をこらしてじっと見ると、それはふとんで、その上に白髪の人が……顔を天井に向けた横顔を見せて寝ていた。さらによく見ると、それは間違いなく黒田徹だった。

ゾツと冷たいものが信平の背筋を走った。

まさか……。死んでいるのか……？

「おい、徹、寝てんのか？ 徹……」

思わず靴を脱ぎ捨てて廊下に入り、そっとガラス戸を細目に開けて、静かに呼びかけた。が、徹はビクともしない。

「おい、徹、おれだぜ！？ 信平だぜ！？」

夢中で戸を開け、駆け寄って、大声で叫んで、ふとんの上から身体を揺すった。すると、「う……」

かすかな、声ともいえぬほどの音が徹の僅かに開いたかさかさの干からびた唇の間から洩れた。掌でその頬に触れると、色は青白かったが温かかった。よかった！ 生きていた！！

「徹、わかるか！？ おれだ！ 田之浦信平だぜ！？ わかるか！？」

耳のそばへ口を寄せて怒鳴って、掛けふとんをめくって彼の手を握った。

「うー……」

すると、徹ははっきりと呻いた。そして、思いもかけないほどの強い力で信平の手を握り返したのだ。

「あつ、徹、わかったんだな？ わかってくれたんだな！？ そうだな！？」

信平はその手を確かめるように振りながら徹の青白い顔を見た。その顔は微かに頷いたように見えたが、固く閉じた眼は開きはしなかった。しかし、その閉じた両岸から透明な涙の粒が湧き出して、大きく膨らんで、ツツツと目尻から耳へ肌を伝って滑り落ちた。

「よかった。生きてて、良かった……」

信平の眼からも涙が吹き出した。

徹に最後に会ったのは四年前で、神戸の病院へ見舞いに来てくれたとき以来だった。その時に比べると、薬の副作用のためか頭髮は半分以下に減ってまっ白になっていたし、頬もこけて頭蓋骨の形がくつきりと浮き出していた。死相が出ている、と言いたところだが、じつとしてみると死人のようにはか見えないうらと思えた。生者必滅、会者定離……。それは解っているし、覚悟もできている積りだった。しかし、徹の姿はまったく意外で、あまりにも残酷だった。

「おい、死ぬなよ!? 生きるんだぞ!! 生きて、アマゾンへ行こう!」

枯れは夢中で叫んで、徹の身体を揺すっていた。

「いいな? アマゾンで南原が待ってるぞ!? いいな? 死んでたまるか? 一緒に行こうぜ!? ……」

何度も同じことを言っていた。

ハッと気がつくと、徹はぐったりとして、ポカンと口を開けて疲れ果てた表情で眠っていた。彼は徹の手をふとんの中へ戻し、ふとんを掛け直してやって、小さく笑った。

(もう一度アマゾンへ行こう! 死ぬなよ。一緒に行くんだ!)

というのは、四年前に徹が彼に言ってくれた言葉だった。いま徹のやつれた顔を見るまでは考えてもいなかった言葉がひとりでに口からとび出してきたのだった。

信平はじつと徹の顔を見詰めて考えた。

(もしかしたら、徹は今でも本当にアマゾンへ行きたいのかもしれない……)

五十年前の大学四年のとき、信平と徹は日本海外学生移住連盟ブラジル実習調査団の十二名のメンバーのうちの二人に選ばれて南米へ旅立った。昭和三十六年だった。外務省からの補助金のおかげで毎年出されるようになった実習調査団のメンバーに運良く二人とも選ばれ、横浜港から四月に移住船あるぜんちな丸で出港し、パナマ運河経由でブラジルのアマゾン川河港の街ペレン沖へ着き、そこから小船で上陸して、約一年間アマゾン各地を訪問して移住地を見学したりそこで実習したりした。

二人は卒業後アマゾン川中流のマナウス市より上流のトメアスーという日本人移住地のさらに上流の新しい移住地へ入り、そこで「エリザベス・サンダーズホーム」という日本の戦災孤児施設の子供達の将来のために、新しい農園を開拓する予定だった。

アマゾンは想像していた以上に凄惨な所だった。アマゾン川は海のようなようだった。三六〇度どっちを向いても水平線だった。熱帯樹林は信じられないほど深くて神秘的で魅力的で生気に溢れていた。太陽も空も河も土地も川も植物も何もかもスケールが大きく、無限の可能性を秘めていた。二人はアマゾンの樹海に火を放ってジャングルを焼き尽くして畑を拓く焼畑の現場に立ち会って、天を焦がす炎と煙を見た。また十メートルを越すボアという大蛇がアマゾン川を泳ぐのを見た。またアマゾン川を豚や鶏を載せてゆったりと下る貨物船の甲板に吊ったハンモックに寝転がって十日も旅したこともある。ピラニアも釣った。アマゾンイルカと並んで泳いだこともある。とにかく毎日が新しい発見と感動の日々だった。あつと

いう間に一年が過ぎてしまった。

「やっぱアマゾンは一生涯を賭ける値打ちのある所だったな？ 早く日本で移住の手続きをして、戻って来ようぜ！」

お互いにそう言い合ってアマゾンを後にして帰国したのだが、その後黒田徹は、家の後を継ぐはずだった長兄が海難事故で急死したために泣く泣く移住を断念したのだが、その後も会うたびに溜息まじりに、

「なあ信平、あのアマゾンへもう一ぺん帰らせてえよなあ……」

としみじみと言った。時には酒に酔ったときなどは涙ぐんで、

「ああ、あのアマゾンの風にもう一度、会いてえよオ……」

と歌うように言うのだった。

母親の病氣のために徹と同様に移住を諦めた信平もそれは同じ気持だった。

アマゾンの風——それはたしかに言葉では言い尽くせないほど懐かしい、すばらしい、その他の所では味わったことのないほどの香りに充ちた魅力的な風だった。百万、いや千万いや一億枚もの木の葉をサヤサヤと音もなく揺らせてジャングルの深い木立を吹き流れる風はひんやりと冷たく、生気に満ち満ちて、清らかで、心が洗われると思うほど豊かに流れ来て流れ去るのだった。そのアマゾンの風にもう一度出会いたいという徹の気持は痛いほどよく解った。

もう一つ、徹と信平が同じようにもう一度アマゾンを訪れたいと願う理由があった。それは、移住を断念した彼等二人を残して予定通りブラジルへ渡り、アマゾン川上流の第二トメアスで初志を貫いて農園を開拓した学生実習団の仲間だった南原雄次との約束だった。

「おれたちもいつか後から行くよ」

と、横浜の大栈橋から出航する南原に二人はそう約束した。そして、それから二十年ほど後に大農園のオーナーになった南原が故郷へ錦を飾りに帰国したときにも、

「いつか必ずお前の農園を見せて貰いに行くから……」

と約束したのだった。もちろん信平も徹もその約束は必ず守るつもりだった。けれども仕事や生活や子育てに熱中しているうちに、あれよあれよという間に時が過ぎてしまって、結局、その約束を守ることができなかつたのだ。というのは、七年前にサンパウロ空港近くで起きた航空機の墜落事故で、南原雄次が六十七歳であつたこの世を去ってしまったからだった。

「なあ、信平、おれたちはあの南原に借りがあるんだぞ？ あいつの墓参りして、あいつの農園の土を踏まないよ、あの世であいつに顔が合わせられないぞ？ そうだろ？ だから信平、死ぬなよ？ 生きて一緒にアマゾンへ行こう！」

四年前徹は信平の手を固く握ってそう言った。おそらくその時彼は本気で信平を連れてアマゾンへ行く気だったに違いない。それなのに、それから一年もしないうちに脑梗塞で自分が倒れてしまった。幸い一命は取り留めたものの糖尿病の影響もあつたらしく失明し、言葉

も出せなくなつて、寝てただ生きていっているという状態になつて、いま彼は何を考へているのだろうか……と信平は思つた。

(しかし、清海まで来て、よかつた！)

と彼はつくづく思つた。徹の妻の春菜の話では、徹は視力と言語能力を失つたばかりでなく、意識を失つていたはずだつた。自分が会つても、徹はそれを認知できないだろうと春菜は言つていた。しかし、ついさつき徹は自分の手を強く握り返し、自分が名乗ると頷いてくれたし、涙まで流してくれた。つまり、親友である自分が来たことを知つて喜んでくれたのだ。あれは何かのはずみだつたのか……？ いや、たとえその時だけでも徹の意識が戻つたのは、思いもかけぬ喜びだつた。植物人間のようになつていても、死ぬ前に一度会いたいとしきりに心が望んだのは、もしかしたら、神の導きだつたのかもしれない……と、信平は思つた。

「ごめんなさい」

小さい女の声がしたので振り返ると、後の畳の上にいるのか小柄な春菜が来てちよこんと座つていた。信平と眼が合うと、春菜は深く白髪混じりになつた頭を下げて、もう一度ごめんなさい、と言つた。

「田之浦先輩、嘘ついていてごめんなさい。いまわかつたでしょう？ 主人は眼も見えず口も効けません、意識はあるんです。でも、それを言えば田之浦先輩が無理してここまでお見舞いに来られるはずだから、意識もなくなつて何も判らないと嘘をつけと、彼が……」

「えっ！？ 徹がそう言つたの！？」

びっくりして信平は徹の寝顔を見て叫んだ。

「はい。私だけでは以心伝心で会話はできるんです。けど、先輩、悪く思わないで下さいね？ 彼はあなたの身体のことを心配して、私にそう言えと指示したんですよ？ 決して友達を騙そうなんて……」

「いや、もちろん解るよ。けど、春ちゃん、今日はここへ来て、ほんとうによかつた！ 実をいうと、ほんとはおれ、こいつにお別れを言うためにここへ来たんだ」

「え？ お別れ、とは……？」

「お前だから正直に言うけど、おれ、死ぬつもりだつた。生きてる張り合いもなくて、そのうえ親友の徹まで植物人間になつたんじゃあ、やり切れないから、一日こいつに会つてお別れ言つて、それからどこかで海へでも身を投げようかと……」

「まあ……」

「たつたいままでその気でいたんだ。けど、いまお前の話聴いて、おれ恥ずかしくなつたよ。だって、徹はこんな身体になつてるのにおれのことを心配してくれていたのに、おれはまったく自分のことだけ考へてすねていたんだ。……けど、今日こいつに会つて眼が覚めたよ。……それで、春ちゃん、一つ訊き難いこと訊いてもいいか？」

「何ですか先輩、いまさら……。もう隠すことなんか一つもないわ。どうぞ……」

「じゃあ訊くけど、徹の病気、生命はまだしばらくは大丈夫なんだろう……？」

「さあ、それは神様のみぞ知る、でしょう」

春菜は昔から変らないおカッパの頭をかしげた。若い頃はふっくらしていた頬のあたりに深い皺が刻まれていたが、苦勞を乗り越えてきた逞しさを感じさせる顔だった。

「先輩と同じ七十四ですから、もうどこが悪くてもおかしくない年令ですけど、お医者様の話ですと、脑梗塞はもうどうにもならない所まで来ているけど、いまずぐ命がどうこうという事とはなくて、運動中枢と言語中枢以外の脳は活動しているのだから、つまり、黙ってじつとしていれば生きられると……」

「ああ、運動中枢も……」

「でもね、先輩、そうしてお医者様から見放されたような主人ですけど、杉並から清海へ帰って、ずい分変わったのよ？ たとえば、ウウとうなる声だけは出せるようになったし、食べる量は以前の二倍になったし、それに、手の指がピクピク動くようになったわ」

「なに？ 手の指がピクピクだって……？ いや、さっき、おれが手を握ったら、ギュッとおれの手を握ったぜ！？」

「えっ！？ ほんとですか！？ 先輩、信じられないわ！ まさか……」

とつぜん春菜が両手で顔を覆ってワツと泣きだした。そして泣きながら夫の徹の横へに寄り寄って、ふとんの中へ手を入れて、眠っている夫の手を探って握った。

「あなた！ あなた！ 起きて！ 私よ！ 春菜よ！」

右手でビシャビシャと夫の頬を叩いた。懸命で険しい表情だった。が、寝ていた徹の口からウーという低い呻き声が洩れた瞬間、春菜の顔が歓喜の表情に一変した。

「あっ！ あなた！ 手が！ 動いた……！ ……わーっ！！ よかったねーっ！！ 田之浦先輩が来て下さったおかげよねーっ！！ 有難う！！ 有難うございます！！ そうだ！！ 青木君！ 青木君のおかげだわ、きつと！ 先輩、青木君が毎日主人の手や腰や肩を揉んでくれたのよ！」

「青木て？ あの静岡の勇助か？」

「そう、勇助君が静岡から来て、主人を揉んでくれたのよ！ もう三日も……。待って！ いま呼んでくるわ！ 裏の民宿の部屋に泊ってるの……」

とび上るように立って駆けだして出て行った。呆然とその後姿を見送ってから、ゆっくりと信平は視線を親友の顔に戻した。その頬は、最初に見たときの青白さが消えて、ほの赤い血の色が射していた。

「おい徹、さすがだな？ お前は昔から絶対ギブアップしない奴だったけど、今度という今度は実感心したよ！ なあ？ 昔アマゾンの支流で遭難したときのこと憶えてるか？ 南原とおれたちと三人で、ジープがエンストして、それから道に迷って日が暮れて、あのときでも、お前だけは絶対諦めなかったもんな？ ……」



信平はしみじみとその時のことを思い出しながら徹に語りかけた。

そこはアマゾン川支流のリオネグロ上流のパリンチンスという日本人が開いた町からジープで半日ほど入った密林ジャングルの中だった。実習中の農園の休日にオーナーからジープ借りて近くにあるカニ族という原住民の部落を訪れたのはよかったが、その帰りに道に迷ったのだった。そのうえジープがエンストし、押せども引けども動かなくなつて、日が暮れかけて暗くなつた森の中で三人は途方に暮れていた。一本道で迷うはずのない道を何故間違つたのか、今でも不思議に思うほどだったから食べ物も飲み物も用意していなかったし、地図も磁石もなかった。着のみのまま、身を守るためのナイフ一丁も持っていなかった。昼間でも太陽の光を通さない密集した巨木の下はすぐに闇の中に沈んで、あちこちでサルの啼き声やオンサ（ジャガー）の咆吼らしい怖ろしい声もして、生きた心地はしなかった。信平も南原もただうろろとその辺を歩きまわつて怖ろしさを紛らわすだけだったが、黒田徹だけはじつと座つて腕を組んで黙つて考えていた。そして二人がガツクリして泣き出しそうになつたのを見て、笑いながら言った。

「なんだ、このぐらいで落ち込むなよ。アマゾンが好きで来たんだろ？ 密林ジャングルの夜を味わう良いチャンスじゃないか」

平然と言つた。

「さあ、ジャンケンで当番の順番を決めよう。枯木を集めて当番は火を燃やすんだ。農園の人たちが搜索してくれたら判るように、な？ そして、あとの二人はジープの中で寝よう。起きてると腹も減るし、明日もある。……え？ 明日か？ その辺の木を集めてイカダ組んで、この先の川を下ろう。そしたら必ず人のいるところへ出るから、とにかく今夜はゆっくり体を休めて眠ることだ」

結局、その夜のうちに農園から探しに来てくれて助かつたのだが、その時の徹の沈着冷静な態度は後で考えても信じられないほど完璧なものだった。

「あのときもそうだったけど、お前はいつでもおれたちのリーダーだったし、いつでもお前は前向きで強かつた……」

そう言つて信平はもう一度徹の手を握手の形で握つて彼の顔を見つめた。

徹の眼は閉じたままで、もう涙は出ていなかった。が、寝ていたときと違って、その顔にははつきりと明確な強い意志いしのようなものが浮き出て、きっぱりと引き締まっていた。

「なあ、徹。いま聴いてくれたかもしれないが、おれは今日のお前に別れを言つてから自殺するつもりだったんだ。けど、こうしてお前に会つと、お前にバカと怒鳴られているような気がしたんだ。いまわかつた。お前はおれに、死んだらいかん、一緒にアマゾンへ行こう！ ……とやりたいんじゃないか？ ちがうか、徹……？」

信平がそう言い終わらないうちに、徹の手がさつきよりもっと強く彼の手を握りしめて

きたのをはつきりと信平は感じた。

その晩信平は清海へ泊った。母屋の裏の民宿用の建物の一室に泊めて貰ったのだ。

三日前に静岡から来てそこへ泊っていた後輩の青木勇助とは卒業以来ほぼ五十年ぶりの再会だった。彼も同じ大学の海外移住研究会の部員で、南米への移住を志して、夏休みには北海道の開拓農家へ住み込んで農業実習をしたり、ポルトガル語の講師を招いて語学研修をした仲間だった。しかし、大学二年のとき視神経を損なう病気に襲われて九〇パーセントの視力を失い、念願のブラジル移住を断念しただけでなく大学も中退して故郷の静岡へ帰って、その後の噂も途絶えていたが、整体師の勉強をして資格を取り、開業して成功していることが判ったのは、つい数年前の、OB会に出席した友達から聞いたことだった。

「あのとき、絶望して死ぬ気でいた自分にマツサージ業への転向を熱心に勧めてくれたのは黒田さんでした。『何もブラジルばかりが人生じゃない』って……。もし黒田さんがいなかったら、自分はいま生きてないでしょう。二十歳で失明同然でしたからね。その恩人の黒田さんのこと聴いたから、身体でも揉まして貰おうと思って来たんです」

と青木はしみじみと言った。

久しぶりに同窓生四人が一つのテーブルを囲んで、酒を飲んで食事をした。夫の手が初めて動いたのがよほど嬉しかったのだろう。春菜は何度もビールで乾杯して、夫の口へもビールを飲ませた。

「春ちゃん、おれ、しばらくこの民宿の部屋借りていいかな？ もちろん部屋代は払うけど……。じっくりと徹のリハビリに付き合って、ゆっくりこいつと話しがしたいんだ」

と信平がいうと、青木も言った。

「実は私もお願いしようと思ってたんです。黒田さんの手と足、なんとか元へ戻る可能性があると思うんで……。いや、静岡はもう悴の代で、従業員もいますし……」

「それはもちろん有難いことで、こちらからお願いしたいことですけど、食事のお世話が……。なんせうちは年寄りがあと二人……」

「いや、春ちゃん、おれたち自炊するよ。学生時代笠戸寮でみっちり仕込まれたし、なあ、青木、それでいいな？ ぜいたくは言わないよな？」

「はい！ 先輩……！」

そこで三人は大笑いになった。七十になっても先輩は先輩なのがおかしかった。心なしか徹の顔も笑っているように見えた。

その晩田之浦信平は姫路の長男の家へ電話を入れた。

「あのな、すまんがおれの下着とか着る物とか、よそ行きのスーツとかは要らんで、ふだん着る物をダンボールへ詰めて送ってほしいんだ。あ、それに、加代子の位牌も入れというは

しい。うん、そうだ。しばらくはこの民宿で自活して、場合によってはブラジルへ旅行するかもしれないのでな、拓哉に受験勉強のためにおれの部屋を使って良いからと、そう言うてくれ。長いこと世話になった。おれのことは心配しないでくれ。なんとか自分で生きてみる。美沙子さんよろしくな？」

一気に言うことを言って電話を切った。有無を言わず一方的に、親父の特権で押し切った。十四年間言いたくても言えなかったことがスラスラと口から流れ出たことが満足だった。信平は久しぶりに、何年ぶりかでクッククックと声を上げて独り笑いをした。

次の日から信平が想像もしていなかった忙しい生活が始まった。春菜は木更津の病院にいる徹の父親と館山のホームにいる自分の母親のために早朝から出掛けたので、徹と青木と自分の三人分の朝食を用意せねばならない。駅近くの店まで歩いてパンやコーヒーや出来合いのサラダやスープなどを手当りしだいに買い集め、走るように戻ってコーヒーやスープを温めトースターでパンを焼いて青木を呼ぶと、

「ちよつと待って下さい。いまおむつ換えてますから」

というのでびっくりして手伝いに行くと、

「あ、先輩、それより布団を干して貰えますか？」

と頼まれて、廊下へ徹の夜具を広げていると、床下の犬がギャンギャン鳴く。

「そうだ！ 犬のえさもやらなくちゃ……」

……といった具合で、朝食もそこそこに部屋の掃除や洗濯を終える間もなく徹を車椅子へ乗せて一キロほど先のクリニックまで行って、帰ったらもう昼飯の時間で……。

結局夕方までに信平も青木もくたくたに疲れ切つて、畳の上に徹と並んで眠ってしまった。けれども、帰って来た春菜に

「ごめんなさい。お二人にこんなことまでさせて……」

と頭を下げられると、また元氣を取り戻して、信平は

「いやいや春ちゃん、ガツクリ気落ちしていまごろ死んでたかもしれないと思えば、徹のためにこのぐらいのことだけでもさせて貰えば本望だよ。明日はもっと働くよ」

と強がって見せるし、青木も

「今日は黒田さん、パン一枚とハム二枚、美味そうにしっかり噛んで食べてくれたし、車椅子に乗るとき、足を僅かだけ踏んばってくれるようになりました。ようやく筋肉がほぐれてきたんでしょう」

と笑顔で言った。

たまたま民宿の管理人のおばあさんが風邪でダウンし、いつもそんな時には頼りになる姪が旅行中だったので孤軍奮闘だった春菜はあらためてその二人の言葉について甘えてしまったのだが――。

三日目に先ず青木が倒れた。猛烈な腹痛で動けなくなったのだ。信平がクリニックの先生

を呼んで来て診て貰ったら、幸い大したことのない大腸炎ということだったが、安静を言い渡された。そのために、徹のおむつ交換の仕事もおむつ洗いも信平に回ってきた。

眼が回りそうだった。やるべきことを全部やるには一日が二四時間では足りないことがわかってきた。そこでヒゲを剃ったり髪をとかしたりというような不急なことは止めて、洗濯も二日に一度にしよう、と思った。

青木が倒れて三日目に、信平の足が動かなくなった。夕飯の買い物へ行こうとして立ち上ったが、膝がガクガクして力が入らないのだ。呼吸を整え、ヤツと気合を入れて立ち上がるが、すぐにヘナヘナと崩れてしまう。顔から脂汗が浸み出てくる。情無い。

これまでは、死ぬことを思えばどんな苦しいことがあっても耐えられる、と思っていた。が、逆に、こんな思いをするぐらいなら、死んどけばよかったかな……という思いが脳をよぎり始めた。

しばらくウンウン呻っているうちにあたりはたそがれて、夕闇が迫ってきた。

隣の主婦が走ってきて、

「あの、いま黒田の奥さんから電話で、大旦那が病院でキトクだもんで、今日は帰れないからよろしくと……」

と言った。えっ！？ と心の中で叫んだ。唯一の心の支えを外された思いだった。目の前が暗くなった。

「それから……青木さんちゆう人にお客さんですけども……」

と主婦が言いながら立ち去ると入れ違いに、五、六人の黒い人影が門を入り中庭を横切つて歩いて来た。遠い水平線の彼方から射す残光が先頭の長身の男の姿をくつきりと浮き立たせていた。頭が眩しく光って、後光が射しているように見えた。

「あ！ 田之浦先輩ではありませんか！？ お久しぶりです。昔お世話になった宮本です」  
三メートルほど前で影が立ち止って、頭を下げて言った。

「え？ 宮本？ ムサシか！？」

思わず大声で叫んだ。三年後輩で笠戸寮にもいた北海道出身の男で、空手が強くてムサシというあだ名で呼ばれていた宮本広一郎だった。頭が禿げていたのですぐには判らなかつた。「青木から連絡貰って、同期の奴等に声かけて連れて来ました」

振り返って、後にいた四人の男と一人の女性を紹介した。信平が知らない顔もあったが、その藤田という女性はよく知っていた。寮の食事を一手に引受けてくれた恩人だったからである。

助かった、と信平は思った。宮本の顔から後光が射したのも、あながち禿のせいばかりではなかったかもしれない。有難くて伏し拝みたい気持ちになった。

後輩達六人はすぐに動き始めた。全員七十過ぎの中期高齢者だが、信平よりは三、四歳若いだけあって、まだ元気が良い。仕事はテキパキとすぐに片付いて、藤田の指揮によって、旅館並みのごちそうもできた。

(やはり生きていてよかった！！)

信平は何度も心の中で叫んだ。まさか五十年前の貧乏学生時代の後輩が助けに来てくれるとは夢にも思わなかった。

その晩は黒田徹を真中にして、久しぶりの酒盛りになった。身動きのできない徹に遠慮するかと思ったら、逆だった。

「黒田先輩に気合入れてあげなきゃあ……」

というので、茶碗酒をガブ飲みして、校歌だの応援歌だのを歌い踊るドンチャン騒ぎになった。すると、腹痛で寝ていた青木までが酔っ払って歌い出して、信平や藤田に酒を飲ませ、徹の口にも酒を注ぎ込む始末で、とうとう夜中までその騒ぎが続いて、全員へべれけで討死にしたのだった。

次の日、また三人の来客があった。二人は徹と信平の同級生で、金沢と八戸から、

「メールで連絡貰ってよ……」

といきなり現れた。あとの一人は、呆れたことに鹿児島から鹿児島大学のOBが来たのだ。たまたま東京へ仕事で来ていて、噂を聞いて来てくれたらしい。学移連(日本学生移住連盟)ブラジル実習調査団の一員として信平や徹と共に一年を過ごした仲である。

「いや、黒田君とは前から約束したことがあるんだ。もーぺんアマゾンの風に会いに行こうと……。冗談じゃなか！ その前に死なれたらたまらんけ、気合入れに来た」

その晩は当然三人の歓迎会を兼ねて、黒田徹を励ますための酒盛りになった。帰宅した春菜や親戚の人達とともに徹の主治医の橋本先生も招待されて、ドンチャン騒ぎの渦の中に巻き込まれていた。

「いや、田之浦さん、私、この黒田徹とはガキの頃からの友達でね、よく一緒に遊んだり悪さしたりしてツルんでましたが、この男ぐらい丈夫な奴は他にいませんでしたな。とにかく、私が知ってるだけでも二回死にかけて……。いや、実際死んだと思いましたが、一度は小学校のとき溺れ死んで、それから中二のとき学校の屋外から落ちて全身打撲で十日も人事不省でね、それでも生き還ってきた奴ですよ。だから今回も……。私でさえ信じられないほどの奇跡的な回復ぶりですよ」

と半ば呆れたような顔で言った。そして、

「実は私もこの徹と一緒にアマゾンへ行く約束していましたね。そう、三年前に、この男から『医者のかせにいまどき煙草吸うような奴はアマゾンへ連れて行かんぞ』って脅かされて禁煙して、おかげで元気ですがね、この分だと、目は見えなくてもアマゾンへは本当に行けそうな感じですよ。奇跡ですよ。三度めのね……」

と、しみじみと言った。

その日から半月が過ぎて、南房総の野山は柔かい新緑に包まれ、海の色も冷たいブルーから明るいつターコイズブルーに変わり、水平線の方から暖かい風が吹きつけるようになった。

黒田徹の様子は日々に好転していた。毎日車椅子で海辺を散歩するので陽やけして血色も良くなってきた。徐々に手に力が戻ってきて、握力トレーニングのためのクルミを握りしめるようになった。声も「う」の他に「あ」と発音できるようになった。

田之浦信平も見違えるほど元気になって、民宿の一室で生活していた。

民宿、といえば、あれから毎日日本のあちこちから同窓や昔の知人が訪ねて来るようになって、八つの部屋が塞がってしまった。それでもまだ新しい客が来るので相部屋になって、それでも足りないのです。母屋の空部屋を片付けて泊めるようにして、とうとう二十人以上の男女が泊るだけでなく、居付くことになってしまった。

「これじゃあ、まったく昔の笠戸寮じゃないですか」

と七十歳の藤田幸子が昔のように委員長になって、寮費を集めた。部屋代込みで一月十万円だ。

「酒代は別よ？ クリーニング代も自分持ちですからね……」

ちゃっかりとサイフのひもを締める構えを見せる。彼女はバツイチ二人の子持ちで、生涯一給食オバさんだったから、寮の管理人にはピッタリだった。宇都宮のマンションに独り暮らしていたが、

「もしここで置いてくれたら、マンション売って、移住して来るわ」という。

田之浦信平も同じ気持だった。そして、他の居残りメンバーに尋ねてみると、誰もが清海での生活を希望しているようだった。

「私は定年後妻と離婚して、長男の家族と同居したけど、どうしても上手くいかなくて、高い金払って老人ホームへ入ったんだけどね、毎日砂を噛むような味気ない生活でさ、早くお呼びが来ないか来ないかと思いつながら生きてたのよ。ところが、この清海でみんなと再会して、ああ、こんなに笑ったの何年ぶりだったべか……こんなうめえ酒飲んだの、若い時以来五十年ぶりかなア……ってよ、思ったら、あと一日でも長く、こんなおれだけんど、ここに居させてくれねえかと……」

と涙ぐむ奴もいた。

結局、全員で話し合って、「第二笠戸寮」を開くことになった。つまり民営のグループホームだ。昔と同じように合議制で、全員一致の賛成で物事を決めることにした。

1、黒田徹の回復を待つて、本年夏、できれば七月、ブラジル・アマゾンを全員で訪問。南原雄次君を偲ぶ会を開く。また他の大学OBと連絡を取り、日本学生海外移住連盟(学移連)設立五十周年記念パーティーをサンパウロで開催する。

2、母屋を改造し、レストランを建設する。

- 3、裏庭及び裏山の遊休地を畑にし、全員で有機野菜を育て、自家用以外は販売する。
- 4、黒田家の漁業権を利用した水産業への参加、水産加工業への参画を目ざす。
- 5、全員が健康づくりプログラムと何らかの仕事に参画する。
- 6、陰口は叩かない。和を以って尊しと為す。

……

議事録の最後の方はいつも酔いと眠気のために文と字が乱れてしまっている。

毎晩の会議は食事のあとで、畳の上へ足を投げ出したり寝転がったりして行なう。中には早くもウトウトしている者もいる。

黒田徹も眼を閉じてじっと聴いているようだ。ときには「あー」と怒鳴ったりする。

会議で決めたことはその場で書いて全員のサインを取る。でないと、翌朝になると忘れたり呆けたりするかもしれないからだ。とにかく年寄りには手が掛かる。しかし、自分もそうだから文句は言えない。それに、いつ呼びが来てポックリ逝くかもしれない身だから、できるうちにできることをやっておくことが大切なのだ。辛いこともある。苦しい場合もある。しかし、たった一人でやけくそになって自殺なんかするよりも、どれだけましかわからない……。

議長の田之浦信平はそう思いながらテーブルの上へよだれを流して舟を漕ぎ始めていた。アマゾンの風のような快い風が窓から入ってきた。

完